

第Ⅲ章 遺 跡

1 遺跡の形成

今回報告する調査地域内には西北隅の県道沿いに数棟の民家が建ち並んでいるだけで、残り
はすべて水田である。全域小字「大りの宮」に属し、かつて関野貞によって「西宮」の遺址に
* 比定されたことがある¹⁾。その後、1965年の『平城宮報告Ⅳ』の段階までは一貫してこの関野説
を採用していた。しかしながら、その根拠は不確かなものである上、後述のように地形的には
ほぼ平坦で奈良時代の遺構の痕跡を示すような水田の地割りは認められず、土壇等の地物も一
例を除いて存在しない。そのため、平城宮内において当地域がどのような役割りを果たしたのか
については、調査前には全く白紙の状態であった。

調査前にお
ける想定

* A 発掘前の地形

調査地は大和盆地西北隅にあたる盆地底に相当し、ほぼ平坦ではあるが全体に東南方向へ緩
やかに傾斜する。海拔高は西北部で70.5m、東南部で69.5mであり、その高低差は南北280m
の間で僅か1mに過ぎない。

当地域内において唯一建物跡の存在を窺わせる地物として、西辺部の小土壇がある。西面中
* 門跡から北へ約160mのところを位置し、その大きさは南北14m、東西8mほどで、周囲の水
田面との比高は70cm内外である。西面大垣に接する位置にあたるため、宮門跡の一つかと考え
られてきたが²⁾、発掘調査の結果、この土壇は近世以降の盛土によるものであり、宮域北部に所
在する佐紀神社の御旅所に関連するものであろうと推定されるに至った(第59次北調査, Fig. 11)。

唯一の地物

1972年に当研究所が行なった地質ボーリング調査によると、当調査地域を構成する基盤層は
* 北方の奈良山丘陵からのびてくる洪積層台地である。そしてその上を沖積層が覆う。沖積層の
厚さは北部では薄く、南へ行くに従って次第に厚くなるが、2~3mの範囲内である。弥生・
古墳時代の遺構も含めて、遺跡はこの沖積層上に形成されており、この沖積層が当地域の地山
に相当するのである。地山上部の層序を概観してみよう。

地 山

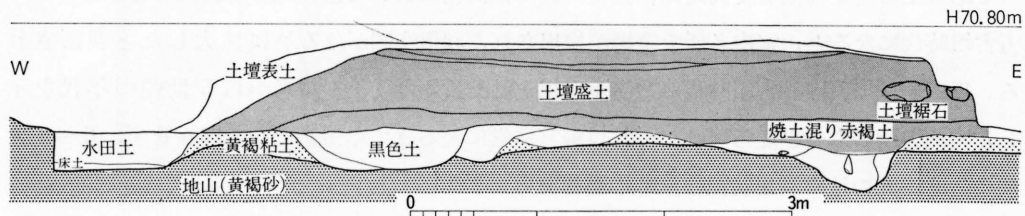


Fig. 11 お旅所土壇東西断面図

1) 関野貞『平城京及大内裏考』(東京帝国大学
紀要 工科3) 1907 p.152。

2) 『平城宮報告Ⅱ』 p.11。

土 層 調査地域は南北に長い、層序は北と南での変化は少なく、むしろ東・西での差異が顕著である。とはいえ、西半から中央部にかけての調査地大半の層序は比較的単純で、厚さ20~30cmの耕作土の下に厚さ10~30cmの水田床土が一面に広がる。この床土を除去すると、厚さ10~50cmの粘質土があらわれるが、この粘質土中には弥生時代・古墳時代の土器片と奈良時代およびそれ以降の瓦片、瓦器の小片などが入り混っており、平城宮廃絶以後に攪乱を蒙った土層と判断できる。さらに下層が沖積層の地山であり、ここに遺跡が形成されているのである。ただし、地山の上面は沖積した土の違いによって、砂から粘土あるいはその中間の土質と場所によって異なり、色調にも様々な変化が認められる。

部分的に存在する整地土層

一方、調査地東部においては、地山との間にさらに別の厚さ10~20cmの粘質土が部分的に存在する。この中には瓦片や土器片が包含されており、かつ少なからぬ奈良時代の柱穴や溝などの遺構はこの上面から掘り込まれている。平城宮の造営あるいは改作に伴って行なわれた整地の際の盛土層と考えられよう（第Ⅰ・Ⅱ期の遺構は地山面において検出されているのに対して、第Ⅲ期以降の遺構は整地土上面で見つかるばあいが多い。しかし、場所によって整地土層の状況が異なるため、何時行なわれた整地土かは特定できない）。

以上のように、今回の調査地では東部において部分的に盛土整地層が存在したものの、大半の地域では地山面が遺構検出面であった。この地山上面では、平城宮およびそれ以降の遺構とともに、平城宮造営以前の弥生時代・古墳時代の遺構も同時に検出している。宮造営前の旧地形にも関連するので、これら宮造営前の遺構についてここでその概要を記すことにしよう。

B 奈良時代以前の遺構

弥生時代の建物1棟、溝2条および土壇6基と、古墳時代の溝5条および土壇6基がある。古墳時代の溝SD6496を除くと、他の遺構はいずれも調査地南部に集中している。また、溝については調査地南端部のSD7016を例外として、すべて西北から東南に向って流れる。土壇のうちいくつかには完形の土器が埋置されており、埋葬施設の可能性が強い。検出した建物が僅かに1棟であるため明確にはなし得ないが、この近辺にそれぞれの時代の集落が営まれていたことを示唆するものである。なお、弥生時代の遺構から出土した土器が畿内第Ⅰ様式のものに限られる点が注目される。宮跡内では第14次調査などにおいて弥生時代の遺構を検出している。これらのうちほとんどは宮西南部に集中し、しかもすべてが畿内第Ⅴ様式に属し馬寮地域のものとは時期を異にしているのである。このことは、弥生時代の居住範囲がごく限られたものであったことを物語ると同時に、弥生時代の期間内において居住地を替えたことを示す¹⁾。一方古墳時代になると、宮内各所で遺構が検出され²⁾、利用空間がはるかに拡大したと判断される。馬寮地域における古墳時代の遺構から出土した遺物は4世紀後半から5世紀の年代を示し、宮内各所のものと変らない。これ以降宮造営に至るまでの遺構は全く存在せず、6~7世紀における此の地の利用状況は全く不明である。

1) 宮西南部における弥生時代の遺構については別途報告書を準備中である。また、第Ⅱ~Ⅳ様

式(中期)の遺構は宮跡内では未検出である。
2) 『平城宮報告X』。

i) 弥生時代の遺構

SB6121 (PLAN 23; PL44) 6ADD-P区

- 調査地西南部にある奈良時代の建物 SB6120 内部において検出した不整形な平面の掘立柱建物である。径約 3 m の円形状に柱穴が分布する。竪穴住居の竪穴壁体部が削平されて床面だけが残った可能性が強い。とすれば東北が入口となる。

SD7023 (PLAN 21) 6ADD-Q・N区, 6ADE-B区

調査地南辺を鍵の手に折れながら西南に流れる素掘り溝である。幅60cm, 深さ20cm内外。自然の流路であろう。堆積土中に畿内第 I 様式の弥生土器片が含まれていた。

- * **SD6985** (PLAN 17) 6ADE-A区

調査地東南隅で奈良時代の南北溝 SD5960 の断ち割り調査を実施した際、その下層で検出した素掘り溝である。幅20cm, 深さ60cm程度で、西北から東南に流れるものと思われるが全体の状況は判らない。木質有機物を含む黒灰色粘土で埋まっているが遺物はなく、埋土の状況と層位から弥生時代ないしはさらに古い溝と判断した。

- * **SK6122** (PLAN 23; PL 44) 6ADD-P区

SB6121 の東南にある長方形の土壇である。長さ 3.0m, 幅 1.4m, 深さ 20cm。中央部から畿内第 I 様式の壺形土器が出土した。かなり削平されているが、土壇墓の可能性が強い。

SK7067・7123・7124・3676 (PLAN 26; PL 44) 6ADD-Q区

いずれも調査地南部にある不整円形の小土壇で、やはり畿内第 I 様式の壺形土器を内包していた。壺棺墓と考えられようが、どの壺も小型である。

* ii) 古墳時代の遺構

SD6496 (PLAN 3・6) 6ADC-G・H・L区

- 調査地北東部を斜行する素掘り溝である。幅80cm。深さ30cm。延長83mにわたって検出したが、溝底の確認は北部のみで行なった。埋土は均一な砂層で、顕著な遺物もなく年代を特定できないが、この溝を切って平城宮の遺構が掘られており、宮造営以前であることは確かである。

SD6137 (PLAN 18・19) 6ADD-P・M区

調査地南半中央を斜行する素掘り溝である。幅 2.0m, 深さ 10cm。後世の削平によって部分的にしか残存していない。溝内から 5 世紀頃の土師器片が出土している。

SD6060 (PLAN 17・18・21・23・24・25; PL 45) 6ADD-N・P・Q区, 6ADE-A区

- * SD6137 の西南をほぼ並走し、調査地東南隅へ至る素掘り溝である。延長 140m にわたり、幅 2.0m, 深さ 25cm 前後。平城宮の遺構と重複するため、それらを避けて部分的に掘り下げた。溝の堆積は 2 層に分れ、上層からは 5 世紀後半の須恵器 (高杯脚部, 杯身など) が、下層からは 5 世紀中頃から後半にかけての土師器 (高杯, 器台, 小型丸底壺など) および須恵器 (壺など) が出土し、5 世紀中頃から後半にかけて存続したことが知られる。西北から東南に向け、地形に沿って蛇行しながら流れており、自然流路であろう。

SD7016 (PLAN 26) 6ADE-B・K区

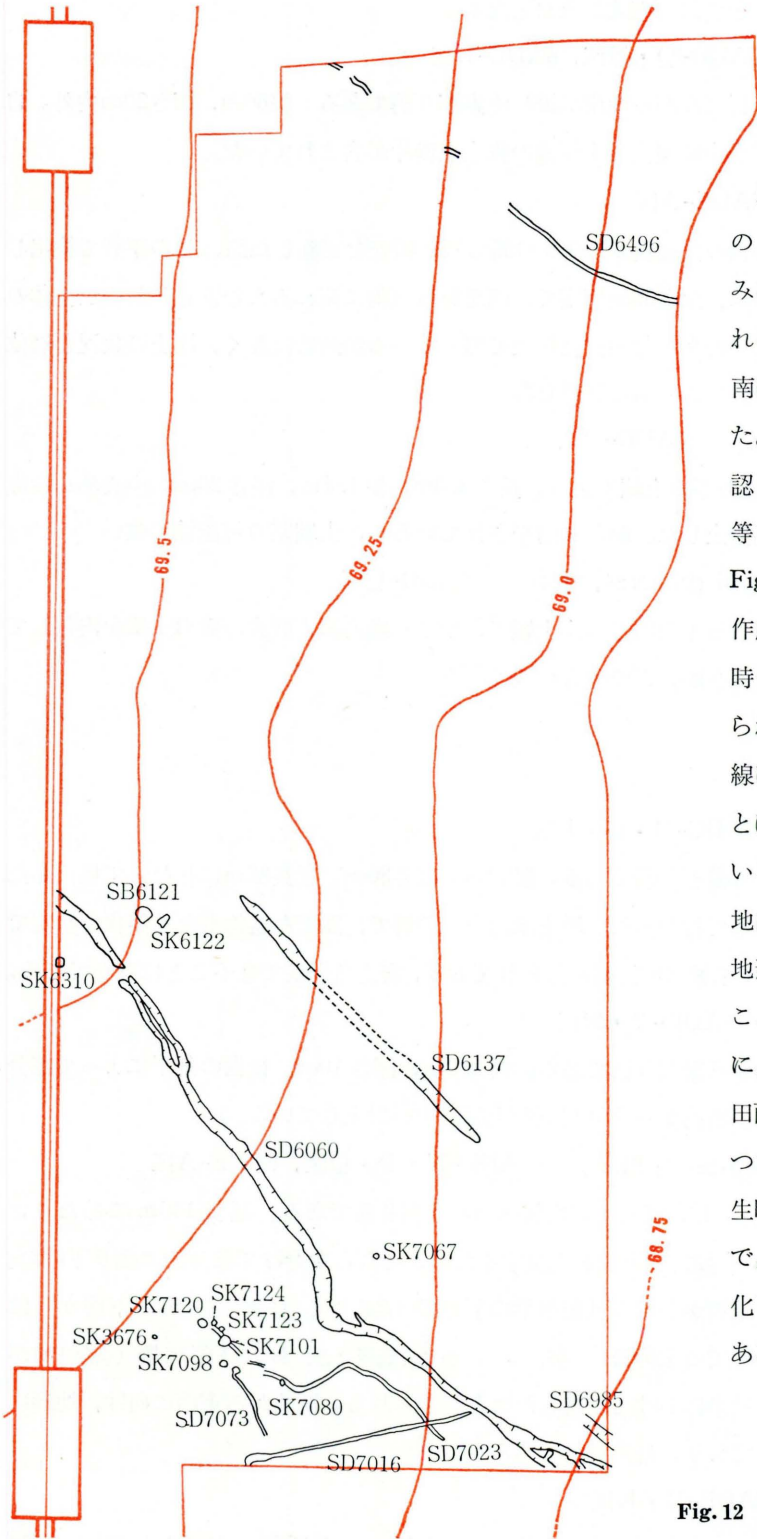
調査地南辺で検出した素掘り溝である。幅70cm, 深さ15cm。SD6060 に交叉する方向に直線

的に掘られており、また西端部で南に直角に曲がるので、人為的に掘られた溝と考えられる。溝内から5世紀代の土師器高杯・壺・甕が出土した。

SK6310・7120・7101・7080・7088・7098 (PLAN 25・26; PL 45) 6ADD-Q区

SD6060の西側に分布する土壌群である。平面形は不整形で、底は丸く窪む。内部に5世紀中頃を中心とする年代の土器を含んでいるが、性格は不明である。

*



C 平城宮造営 以前の地形

以上の宮造営以前の遺構のうち、特に溝に注目してみると、自然流路と考えられる溝はすべて西北から東南に流れていることが判った。また、今回の調査で確認した地山の高さをもとに等高線を描いてみると、Fig. 12のような地形図が作成できる。この図に奈良時代以前の自然流路と考えられる溝を重ねると、等高線にほぼ直交する。このことは、いくらか削平されていると言えども、残存する地山面が奈良時代以前の旧地形を反映したものであることを裏づけている。さらに、この地形図は現況の水田面の傾斜にも近似する。つまり、当地域の地形は弥生時代以降現代に至るまで、基本的にはほとんど変化していないと言えるのである。

Fig. 12 宮造営以前の地形と弥生・古墳時代の遺構